

令和3年度第3回総合教育会議

新たな学校のあり方について～新たなステージへ～

目 次

- 新たな学校のあり方について (1～4頁)
- 授業の改善 (5頁)
- カリキュラムの改善 (6頁)
- 学校群を中心としたマネジメント (7頁)
- 学校群のかたち (8～12頁)
- 今後のスケジュール (案) (13頁)
- 参考資料 (14～15頁)

【堺市の考え方】次代を担う子どもたちの未来を見据えて①

急激に変化する時代

Society5.0時代

AI、ビッグデータ、IoT、ロボット等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられ、社会のあり方そのものがこれまでとは非連続と言えるほど劇的に変わる超スマート社会（Society5.0）の到来

予測困難な時代

新型コロナウイルス感染症の感染拡大など、先行き不透明な予測困難な時代

人生100年時代

世界一の長寿社会を迎え、教育・雇用・退職後という伝統的な人生モデルからマルチステージのモデルへ変化

グローバル化

在留外国人、海外在留邦人数ともに増加。情報通信や交通分野での技術革新により、地球規模で人、モノ、情報が移動。社会のあらゆる分野でのつながりが国境を越えて活性化

人口減少

2040年までにかけては、一貫して人口減少、少子高齢化が進展

これからの学校には

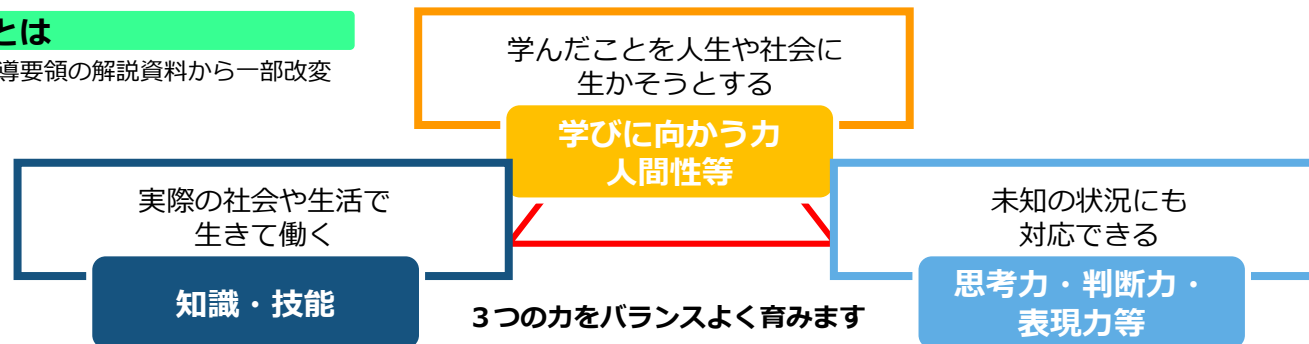
自分のよさや可能性を認識
あらゆる他者を価値のある存在と尊重
多様な人々と協働

様々な社会的変化を乗り越える
豊かな人生を切り拓く

持続可能な社会の創り手と
なることができるような
資質・能力の育成が求められる

育むべき資質・能力とは

資料：文部科学省 新学習指導要領の解説資料から一部改変



<参考> OECDが示す変革をもたらすコンピテンシー

資料：中央教育審議会初等中等教育分科会（第134回）資料から一部改変

新たな価値を創造する力

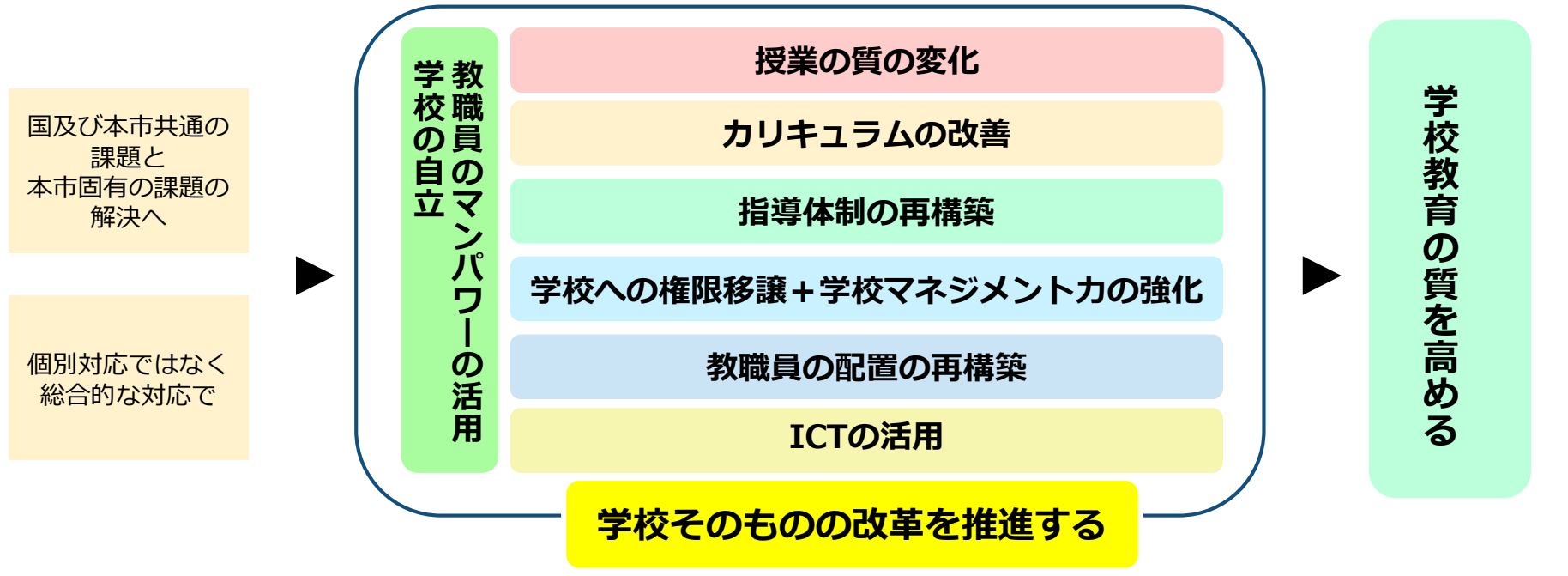
対立やジレンマを克服する力

責任ある行動をとる力

【堺市の考え方】次代を担う子どもたちの未来を見据えて②

急激に変化する時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力の育成に向けて

多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実

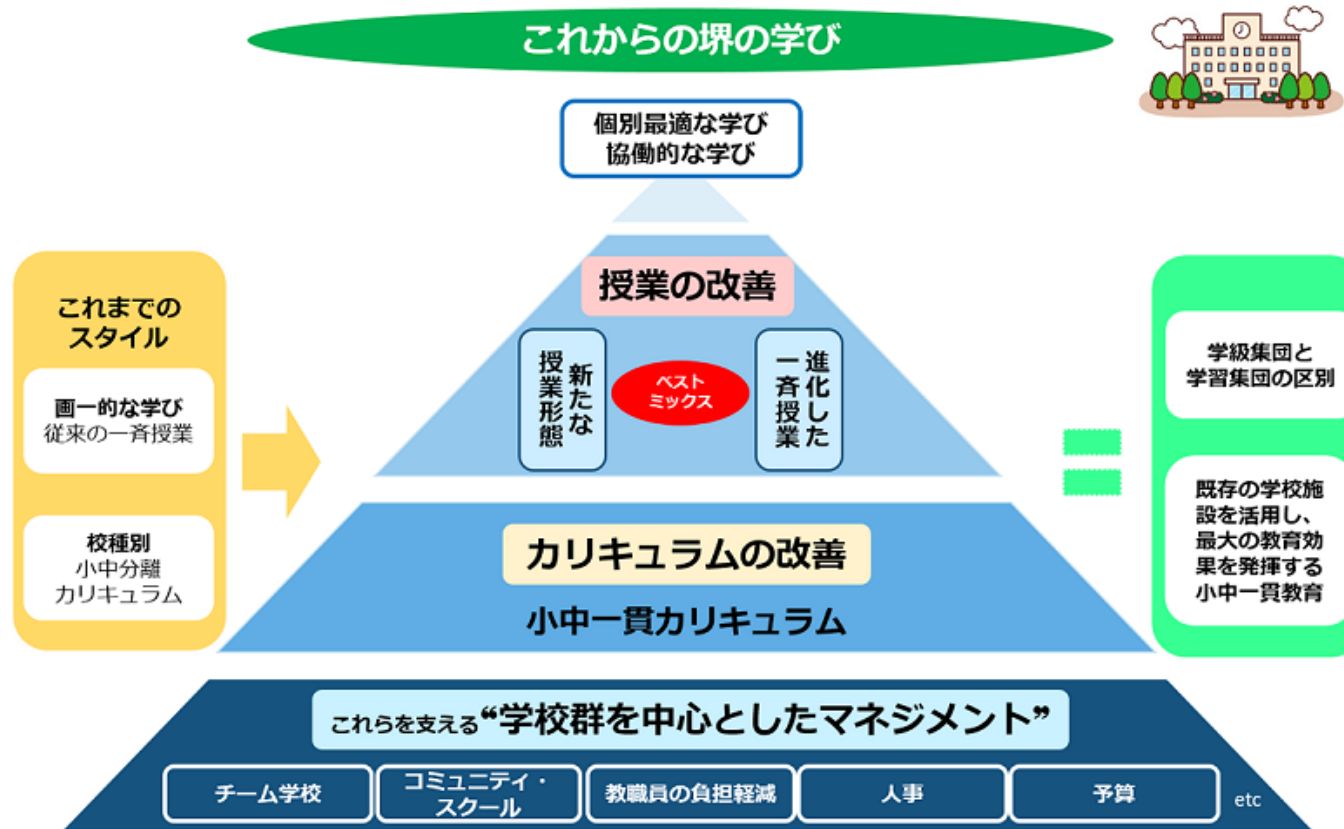


＜参考＞堺市における教育の抱える課題

- 少子高齢化、人口減少による学校教育の維持とその質の保証に向けた取組の必要性
- 子どもたちの多様化（特別支援教育を受ける児童生徒や外国人児童生徒等の増加、貧困、いじめや不登校児童生徒数の増加等）
- 中学校では、全国学力・学習状況調査における無回答率や学力低位層の割合が高い
- 教師の長時間勤務による疲弊
- 学校規模の差による規模適正化（小規模校・大規模校が混在） など

これからの堺の学び～ 教育が抱える課題の解消と子どもたちの未来を見据えて～

- 【背景】 学校教育には、次代を切り拓くイノベーションの源泉である創造性と「多様性」「公正や個人の尊厳」「多様な幸せ（well-being）」の価値が両立する持続可能な社会の創り手を育むことが求められている
- 【目的】 急激に変化する時代を生きる子どもたちに**必要な資質・能力**を育み、子どもたちの**可能性を引き出す**
- 【取組】 **学校園の変革**を推進し、「**令和の日本型学校教育**」を実現する
- 【めざす学校】 **子どもの未来をつくる学校** ～自主性・自律性に富んだ自立した学校～



これからの堺の学び～ 自立する学校群 ヒト・モノ・カネの集積を生かした自主性・自律性に富んだ学校群づくり～

■ これからの堺の学び

授業の改善・カリキュラムの改善による個別最適な学びと協働的な学び

子どもの学びを校種で分断せず、既存の学校施設を活用し、最大の教育効果を発揮する**小中一貫教育**

- ✓ 授業の改善
- ✓ カリキュラムの改善
- ✓ 学校群を中心としたマネジメント

I 授業の改善

- ・ 画一的な学びから**学級集団と学習集団を区別**した学びに変更し、**新たな授業形態と進化した一斉授業**のベストミックスをめざす。

II カリキュラムの改善

- ・ 義務教育9年間を見通した**カリキュラム**のもと、**系統性・連続性**を意識した教育活動に取り組む。

方策として

実現可能な体制構築が不可欠

III 学校群を中心としたマネジメント

- ・ ヒト・モノ・カネの裁量権限の拡大
- ・ 教職員の共通理解

IV 【学校群のかたち】

- ・ 中学校区を一体的にマネジメントする小中一貫教育体制＝学校群

I 授業の改善

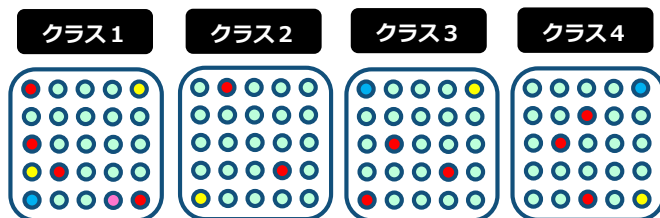
- 画一的な学びから、**学級集団と学習集団を区別した学び**に変更し、**新たな授業形態と進化した一斉授業のベストミックス**をめざす。

これまでのスタイル

画一的な学び

従来の一斉授業

学級集団 = 学習集団

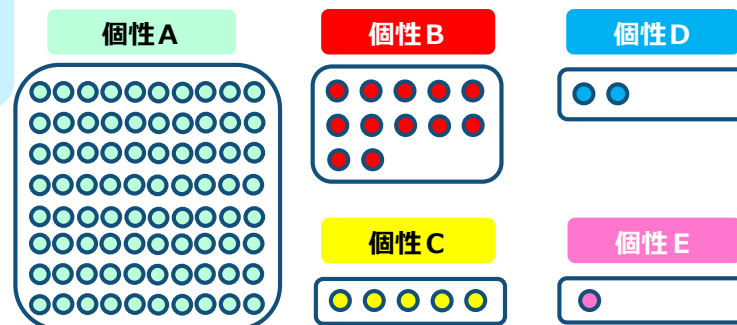


これからのスタイル

個別最適な学び
協働的な学び新たな授業形態
進化した一斉授業

学級集団 ≠ 学習集団

(例1)

クラス内における様々な個性※
をもつ子どもたちの存在を意識
した授業展開※一人ひとりの多様な能力・適性、
興味・関心、性格、学習経験等

(例2)

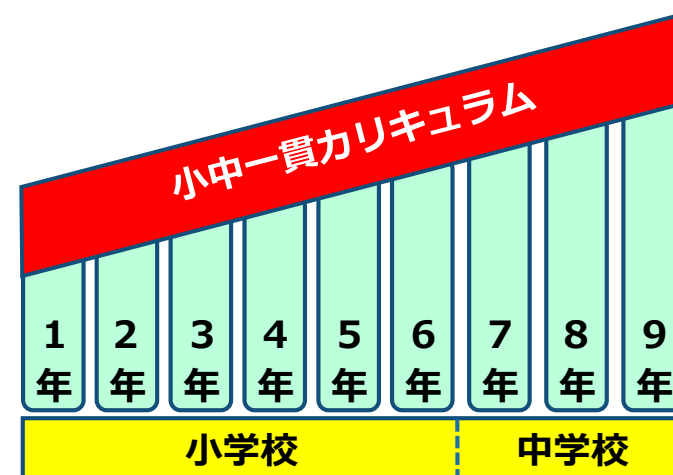
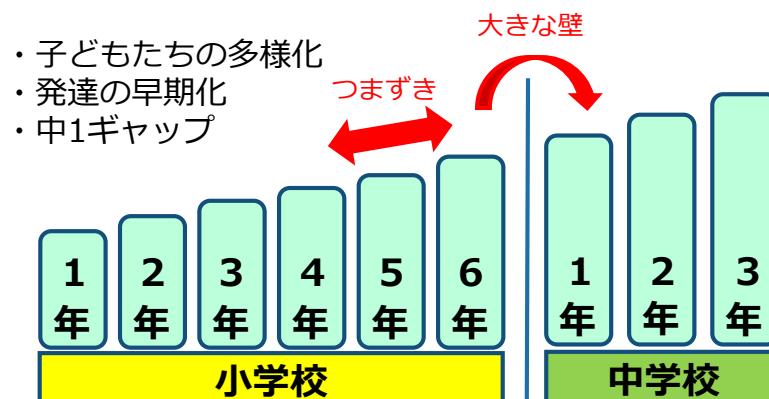
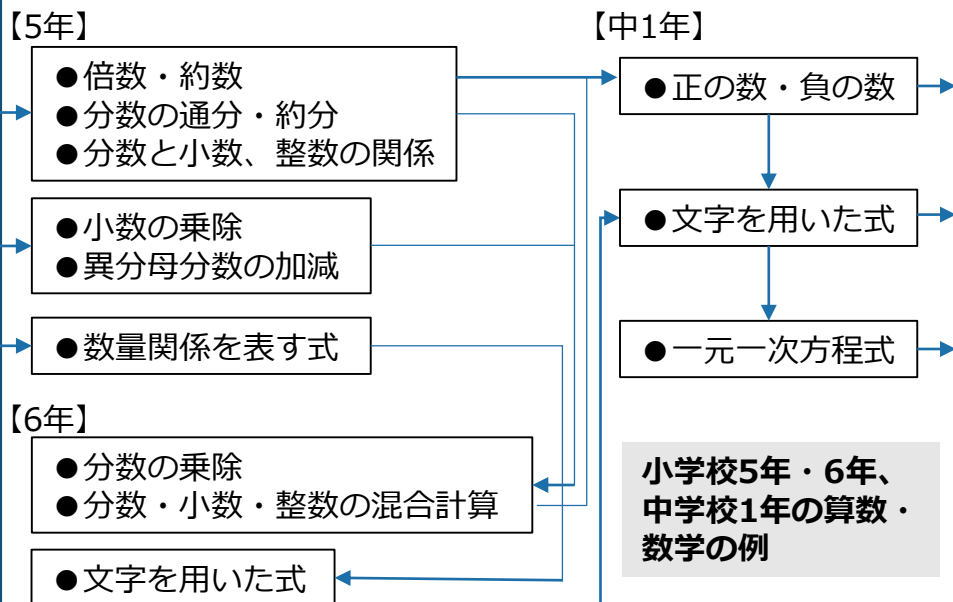
学級集団を学習集団ととらえても、様々な個性をより意識した授業展開

Ⅱ カリキュラムの改善

- ・ 中学校区を一体的にマネジメントする学校群を設定し、義務教育9年間を見通したカリキュラムのもと、系統性・連続性を意識した教育活動に取り組む。

- 各教科等の系統性をふまえ、学年間・学校間の接続を円滑なものとし、義務教育9年間を見通したカリキュラムを支える指導体制の再構築が必要
- 新学習指導要領のねらいとする資質・能力の育成に向け、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成や探求的な学習の充実等が必要

【教科における系統性】



9年間一貫した学習指導・生徒指導を行うためのカリキュラムを構築

Ⅲ 学校群を中心としたマネジメント

目的

急激に変化する時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を育み、子どもたちの可能性を引き出す

めざす学校

子どもの未来をつくる学校～自主性・自律性に富んだ自立した学校～

＜学校が自立できる仕組みの一つとして＞

- ✓ 校長を中心とした**学校組織のマネジメント力の強化**が必要
- ✓ 子どもたちと向き合う教職員が、自主性・自律性をもち、学校に関わる**多様な他者と対話し、協働による学校運営**が必要（＝「連携と分担」による学校マネジメントの実現）

【学校群のかたち】

中学校区を一体的にマネジメントする小中一貫教育体制の構築

そのためには

【制度面】

ヒト・モノ・カネ
の裁量権限の拡大

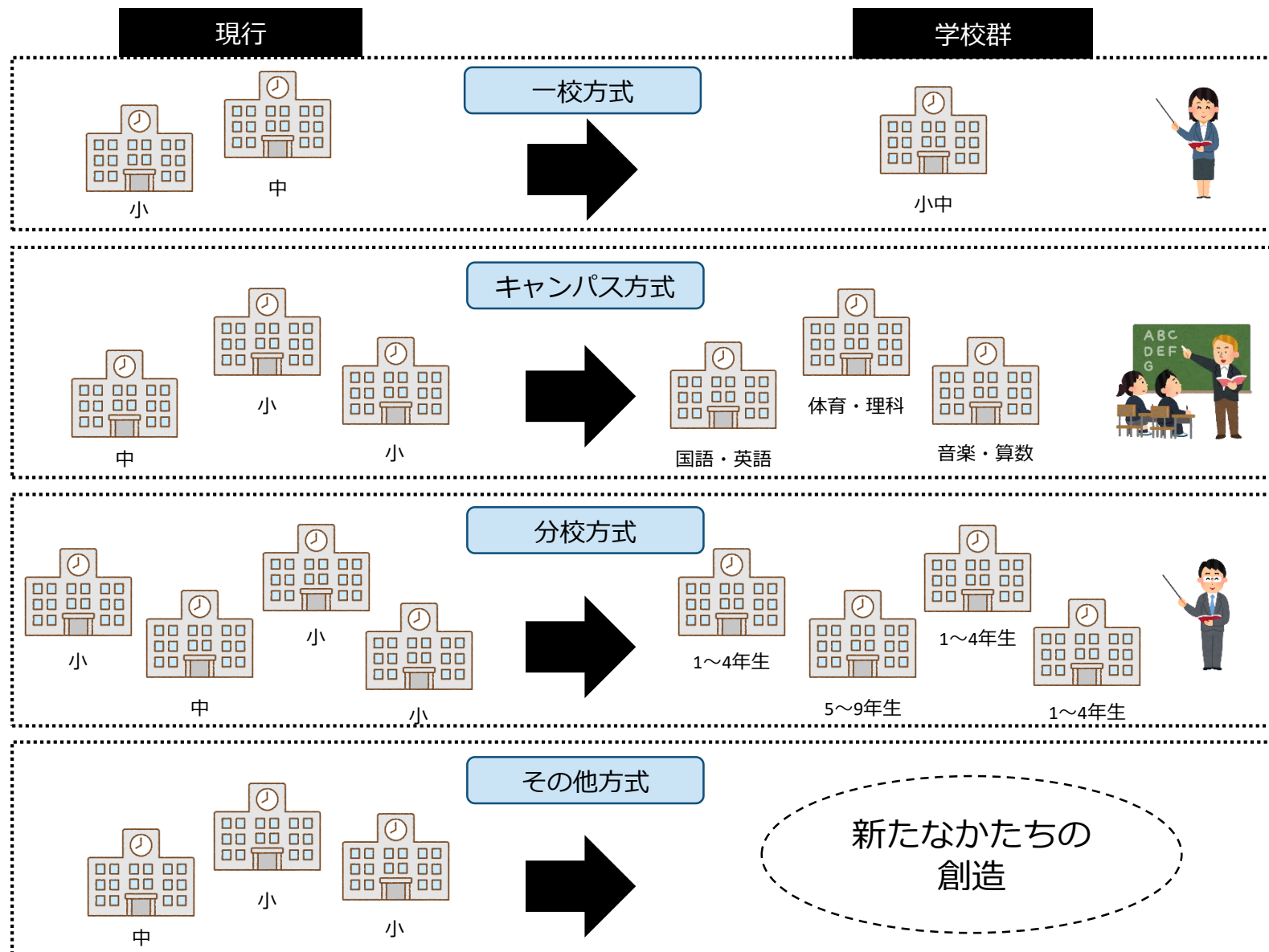
- 学校群を単位として配置される教職員数を総量で捉える人事制度の構築のほか、施設（敷地面積、床面積等）や予算も総量で捉える制度の構築
- 上記のことを運用する仕組みの構築

【運営面】

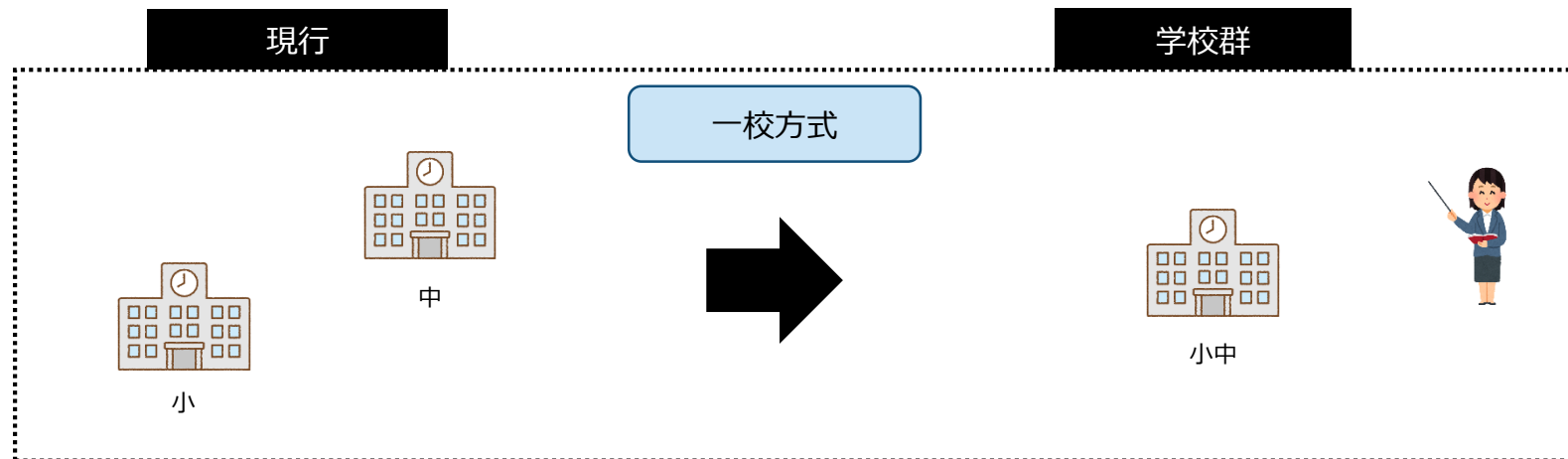
教職員の共通理解

- 学校群を中心としたマネジメントによる教育的効果について、校長や教職員が共通の認識をもち、取組を進めること

○学校群のイメージ（例）

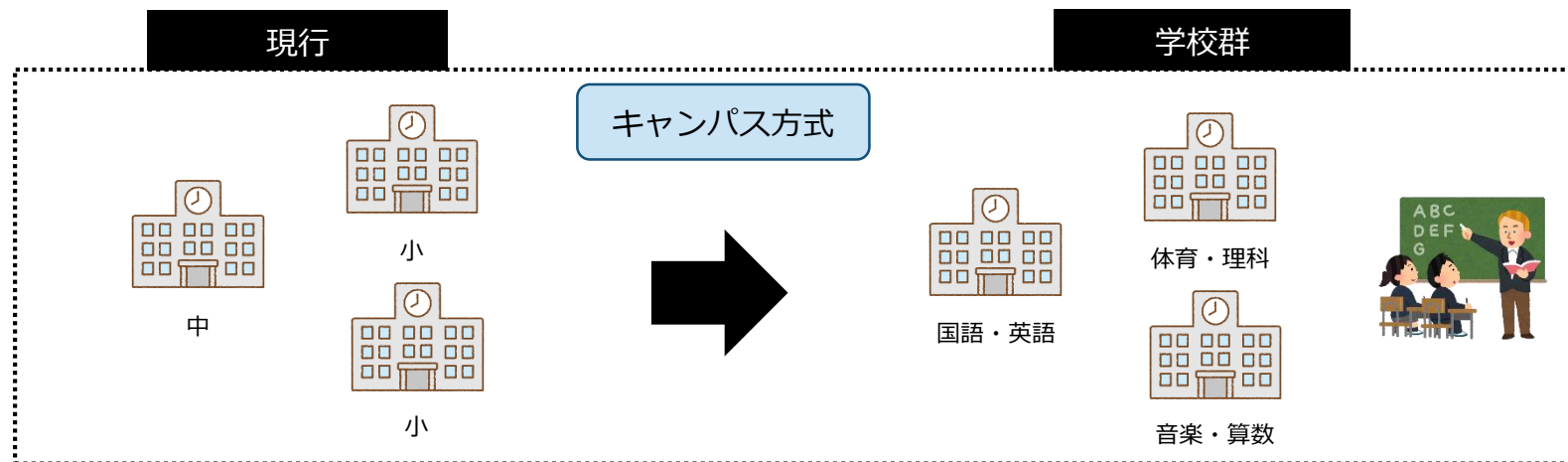


○学校群のイメージ（例）



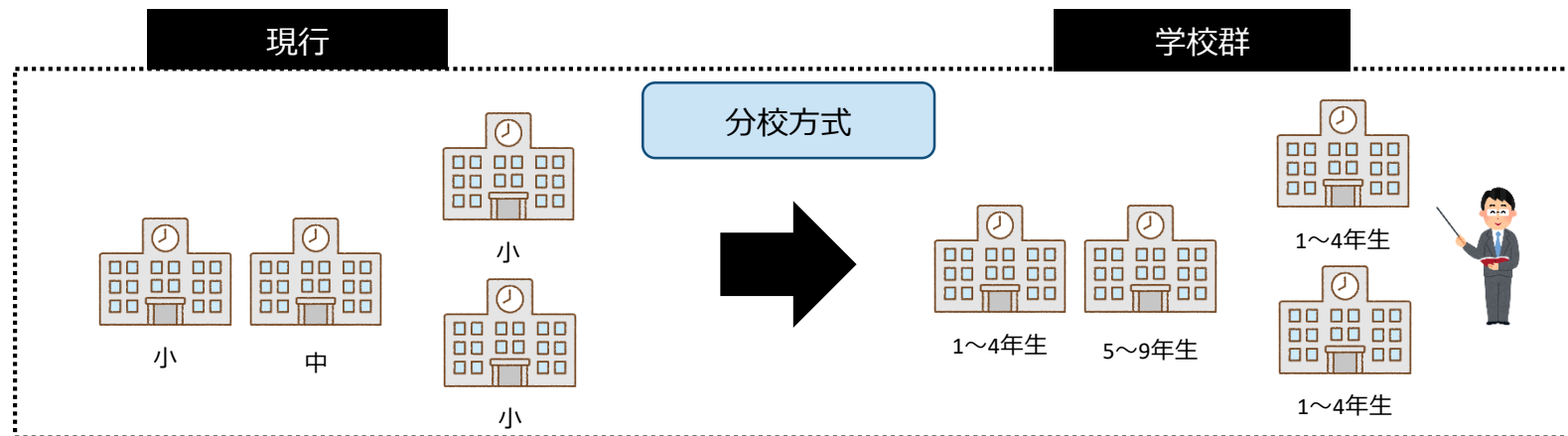
- 小学校と中学校を同一施設に統合。
- 全児童生徒が1つの学校に通うという特質を生かし、柔軟な学年段階の区切りの設定や、学年段階間、学校段階間での指導内容の入れ替えなどが容易になる。
- 2校以上の学校を1校にまとめるため、減少した学校施設の維持管理费用や将来の改築費用を削減できる。

○学校群のイメージ（例）



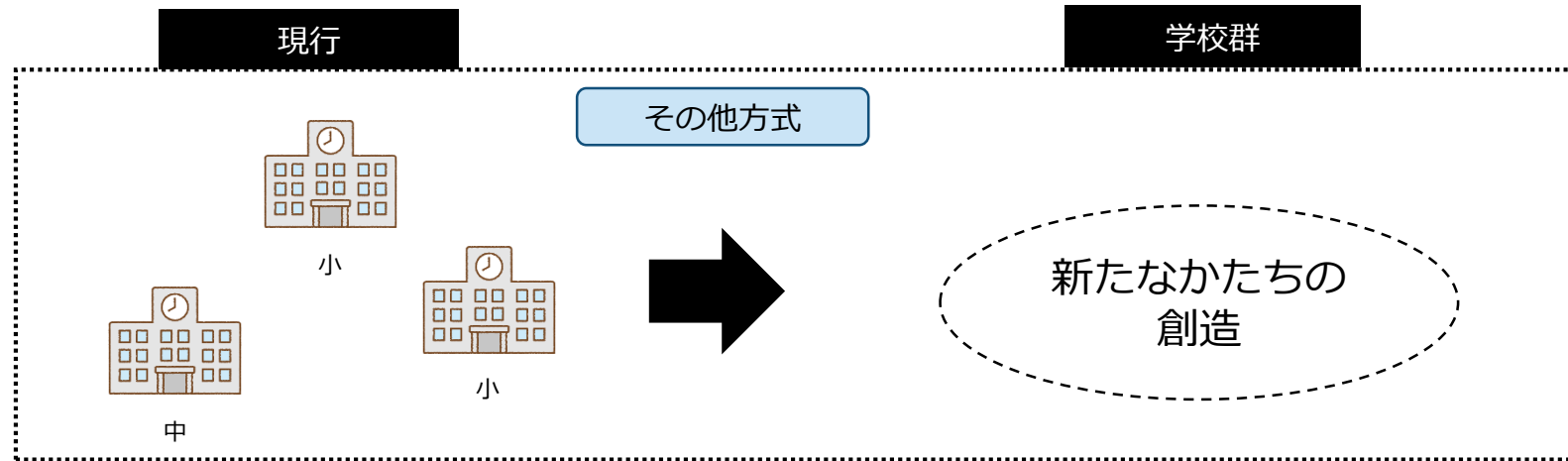
- 従来の校区を維持したまま、学校群内の学校ごとに授業を行う教科が決まっており、児童生徒は日を単位としてその学校に通う。
- より教科の専門性の高い指導が促進される。
- 特別教室を使用する教科を行う学校が限定されることにより、使用しない特別教室の有効活用が可能。
- 体育を行う学校が限定されることにより、体育館、プールの将来の大規模改修、改築費用の削減が見込まれる。

○学校群のイメージ（例）



- 従来の校区を維持したまま、5・6年生は中学校に通学する。
- より現在の子どもの発達段階に即した指導を行うことが可能。
- 各小学校の在籍学年が2学年減少するため、余裕教室を有効活用することができる。（例）のびのびルーム活動場所へ転用、認定こども園等への貸付

○学校群のイメージ（例）



- キャンパス方式と分校方式のハイブリッド方式も含め、新たなかたちを創造する。

○ 今後のスケジュール（案）

- | | |
|----------------------|---------------|
| ・ R3（2021） | 構想期間 |
| ・ R4（2022） | 制度設計 |
| ・ R5（2023）～ R6（2024） | 準備期間（モデル実施含む） |
| ・ R7（2025） | 実 施 |

次代を担う子どもたちの未来を見据えて

【国における議論】

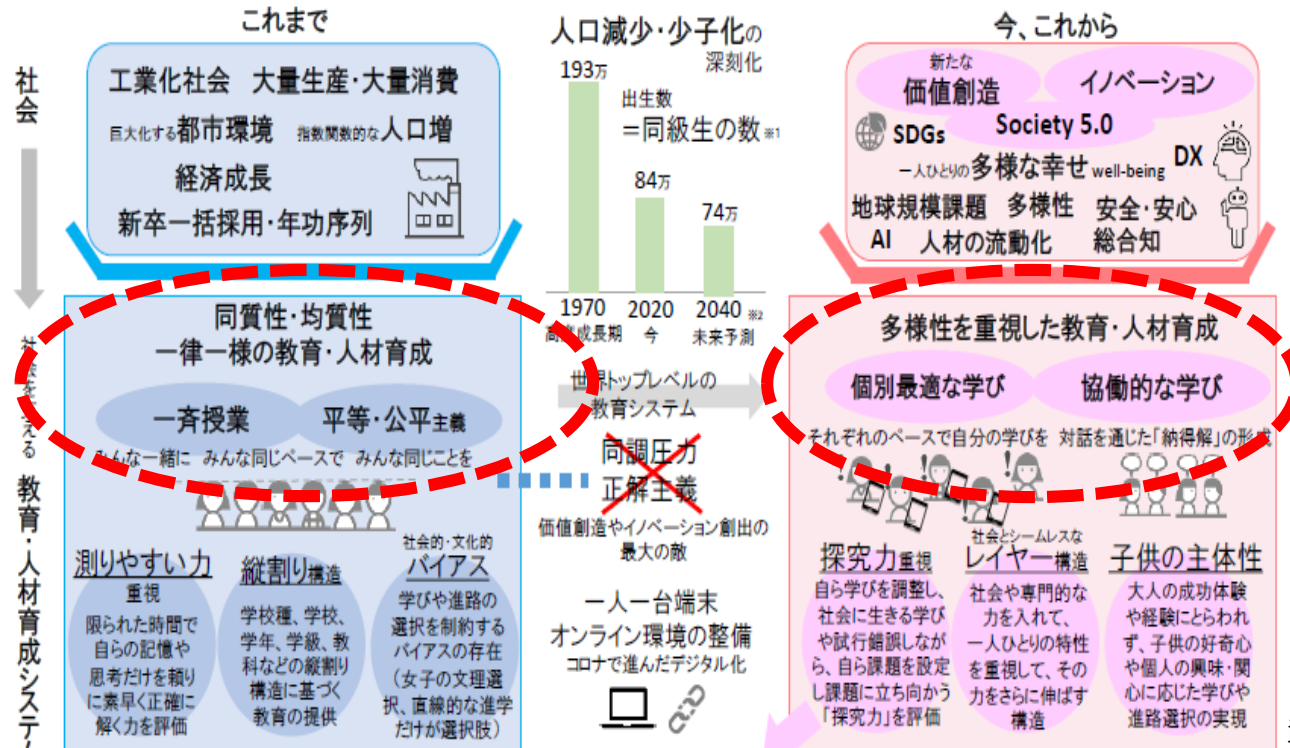
○「一人ひとりが多様な幸せ (well-being)」をめざすSociety5.0時代、DX、アフターコロナという大きな転換期にある今、

教育・人材育成システムの抜本的な転換が急務

○これまでの工業化社会における「同質性・均質性の一律一様の教育・人材育成」から、これからの社会における「多様性を重視した教育・人材育成」へ転換

※2017年の学習指導要領改訂により資質・能力重視の教育課程への転換

(教育・人材育成システムの転換の方向性)



▶子どもの認知の特性をふまえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「そろえる」教育から「伸ばす」教育へ

▶一つの学校がすべての機能・役割を担う構造からデジタル技術も最大限活用しながら、社会や民間の専門性やリソースを活用する組織へ

▶皆同じことを一斉にやり、皆と同じことができることを評価してきたこれまでの教育に対する社会全体の価値観を変えていくことが必要

Society5.0の実現のために、学校教育には、次代を切り拓くイノベーションの源泉である創造性と「多様性」「公正や個人の尊厳」「多様な幸せ (well-being)」の価値が両立する「持続可能な社会の創り手」を育むことが求められている

資料：中央教育審議会初等中等教育分科会（第134回）
「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ（中間まとめ）」一部引用・改変

OECDが示す変革をもたらすコンピテンシー

The **OECD Learning Framework 2030**
 OECD Education2030:The Future of Education and skills. Position Paper
 ※ラーニングコンパスについては、2019年にOECDより新しい図も公表されている



OECDでは、個人と社会のwell-beingを実現していくためには、子どもたち一人ひとりが「エージェンシー※」を発揮しながら、

- ①新たな価値を創造する力、
- ②対立やジレンマを克服する力、
- ③責任ある行動をとる力、

という3つの「変革をもたらすコンピテンシー」を身につけていくことが重要だと指摘している。

※エージェンシー：変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力。≡主体性

資料：中央教育審議会初等中等教育分科会（第134回）「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ（中間まとめ）」一部引用・改変